

冷波五傳記

京傳

全二冊

寛政二

13
2946
31



へ13特
2975

へ13
2946
31

冷哉波立清水已叙
 夫源平の盛衰や蝸牛の角も亦細
 の争ひ近前也予今視乃海と西海
 比一毫の室と放く机よ小哉ふ蒼直樂
 屋の安み居く綱の上を冬に心をうつる
 輕業士の么息も等武士の常也其理
 として幼童も授るやんと欲嗚呼妄言
 たり哉

山東
 京傳誌





河津の
うらやま
このうらやま
わすれぬ

おのれ
おのれ
おのれ

おのれ
おのれ
おのれ

今日の
おのれ
おのれ

おのれ
おのれ



せら
おのれ
おのれ
おのれ

おのれ
おのれ

おのれ
おのれ
おのれ



及立

及立

仲のりまんも
がわりのりまんも

仲のりまんも
がわりのりまんも

此の山は昔は...
 大の...
 今...
 ...



向の...
 ...

...
 ...

...
 ...



...
 ...

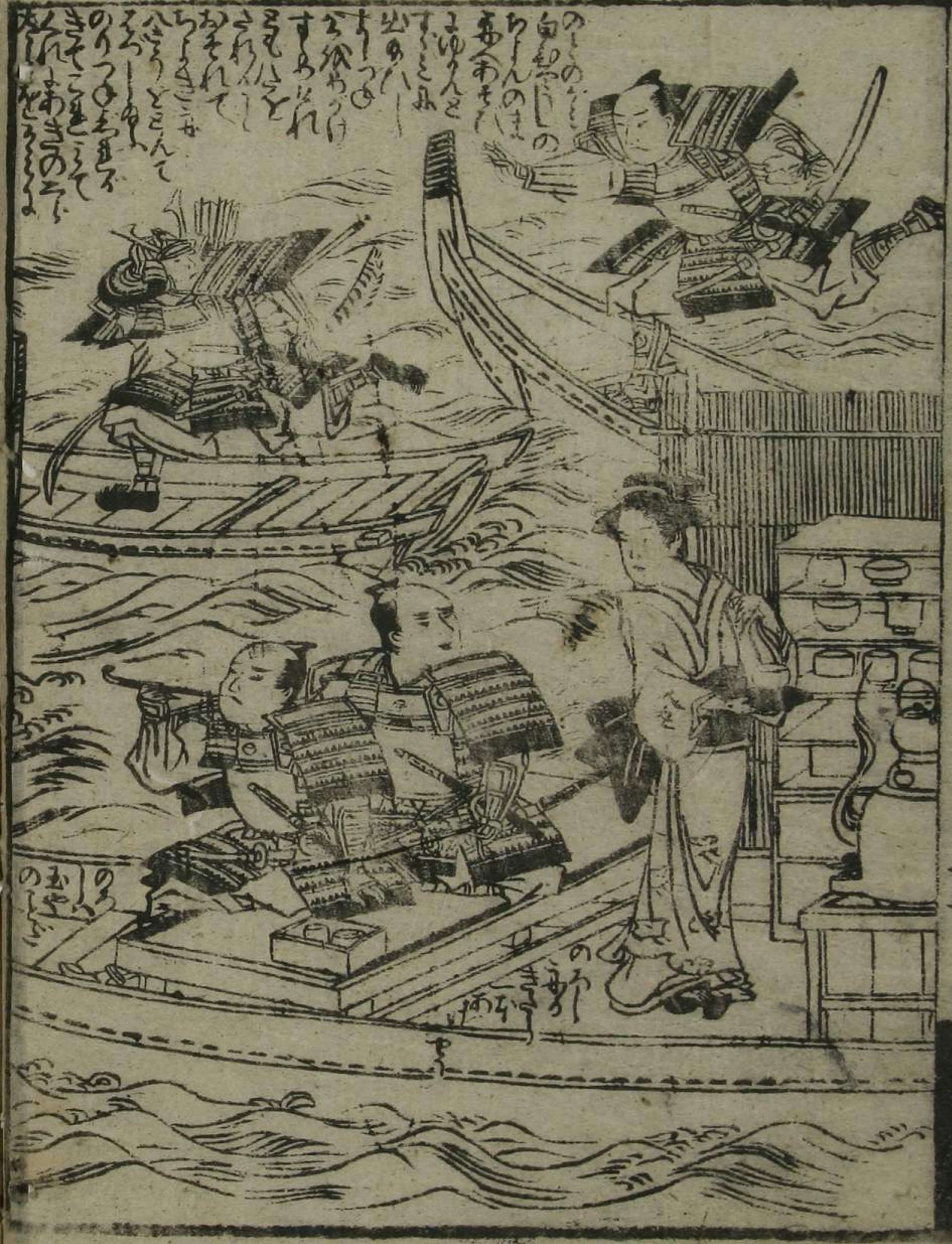
...
 ...





舟休所の日向屋に属する舟の舟内には、千載集講釋の書物が積まれている。舟は、波を乗り越えて航行中である。

舟休所の日向屋に属する舟の舟内には、千載集講釋の書物が積まれている。舟は、波を乗り越えて航行中である。



舟内には、一人の女性が立っており、一人の男性が座っている。舟には、食器や調理器具が備わっている。背景には、もう一艘の舟があり、一人の男性が大きな荷物を背負って歩いている。舟は、波を乗り越えて航行中である。

舟休所の日向屋に属する舟の舟内には、千載集講釋の書物が積まれている。舟は、波を乗り越えて航行中である。

京傳作



おのり平家久しうらほ
ちひかりかてしうらほ
いそぎとゆりて平家と
わらほしうらほいそぎ
のうらほしきとてうら
まてうらほておのり
くらまのうらほゆらほ
まごころと大のれい
あそよんまよしうら
えいふらとまよあひま
るせんしきいゆらほ
しき代わてうらほ
ゆきたり
テニツテ

五

